『菅家文草』巻三注釈稿（四）

佐藤信一

【一八五番詩注解補足】

前稿（『「菅家文草」巻三注釈稿（二）』）の一八五番詩「尚書左丞餞席同賦二贈以レ言、各分二一字一、探得レ時」の「悲」、「言」、「贈レ我」等の同語の頻出を問題にしたが、参考になる中国の用例として、初唐王勃「秋江送別二首（一）」「早是他郷値二早秋一、江亭明月帯二江流一」を挙げておく。

【一八七番詩注解訂正】

前稿（『「菅家文草」巻三注釈稿（二）』）の一八七番詩「北堂餞レ宴、各分二一字一、探得レ遷」の注に於いて「遷」を「遵」の異体字であるとしたが、正しくは「道」の異体字であった。ここに謹んで訂正する。

【一八八番詩注解訂正】

前稿（『「菅家文草」巻三注釈稿（三）』）の一八八番詩「中途送レ春」の「風光今日東歸去」の「風光」を現代語に於ける「風景」の如くに解釈していたが、ここは原義通りの風と光の義であろう。「風光今日東歸去」で風と光が東の方に去っていってしまうの義。ただ同じ言葉が一九〇番詩「得二故人書一以レ詩答レ之」で「坼レ封知二再改二風光一」とあるのは、そこに引用した白詩「春來頻與二李二賓客一、郭外同遊。因贈二長句一」「風光引レ歩酒開レ顔、送レ老銷春嵩洛間」と同様に、景色、眺めの義で採っておく。

校異に用いた略号を確認しておく。

【略号】

〈内A〉…内閣文庫A本（底本）
〈川口〉…川口久雄氏旧蔵本
〈内B〉…内閣文庫B本
〈尊A〉…尊経閣文庫A本
〈尊B〉…尊経閣文庫B本
〈尊C〉…尊経閣文庫C本
〈尊D〉…尊経閣文庫D本
〈蓬左〉…蓬左文庫蔵本
〈別雷〉…賀茂別雷神社蔵本
〈道A〉…道明寺天満宮蔵A本
〈多A〉…多和文庫A本
〈多B〉…多和文庫B本

〈東A〉…東大所蔵A本
〈東B〉…東大所蔵B本
〈京A〉…京大所蔵A本
〈京B〉…京大所蔵B本
〈陽明〉…陽明文庫蔵本
〈資A〉…京都府立総合資料館蔵A本
〈資B〉…京都府立総合資料館蔵B本

【本文】

191　金光明寺百講會、有レ感
　三十日來草不レ青
　今朝雨降※惣神靈
　何爲頂上重加レ頂
　永戴仁王般若經

※降…一字欠、〈多B〉〈東A〉〈東B〉〈京A〉〈京B〉〈資A〉〈資B〉により補う

【校異】

惣…惣〔別筆ニテ記ス〕〈尊A〉摠〈尊D〉〈多B〉〈東A〉〈東B〉〈京A〉〈京B〉〈資A〉〈資B〉〈京A〉〈陽明〉、降…一字欠〈川口〉〈内注記ス〕〈別雷〉両〈京A〉〈陽明〉、降…一字欠〈川口〉〈内B〉〈尊A〉〈尊B〉〈尊C〉〈蓬左〉〈別雷〉〈道A〉〈多A〉〈京A〉〈陽明〉、惣…物〈別雷〉〈道A〉〈多A〉〈京A〉〈陽明〉、爲…道〈川口〉、戴…一字脱〈蓬左〉

【平仄】

○●●○●●◎

○○●●●○◎
○○●●○●
●●○○●●◎

七言絶句。仄起式。下平声青韻。転句と結句は互いに平仄が入れ替わった形になっている。音律も美しかったであろう。

【訓読】

191　金光明寺百講会、感（よろこび）有り
　三十日（みそか）　來（このかた）草青からず
　今朝雨降りて惣（すべて）神靈なり
　何ぞ頂（ちやう）の上に重ねて頂（ちやう）を加ふることを為（な）さん
　永く戴（いただ）く仁王般若經

【注釈】

◇金光明寺…金光寺か。三豊郡仁尾村、仁保にあった。真言宗御室派。行基の創建。本尊は聖観世音（井上圓了他監修『大日本寺院総覧』大正五年九月、明治出版刊に拠る）。ただ三豊郡は讃岐でも国府から西に隔たった地。着任してからややあっての作か。

◇百講會…『仁王般若経』を講ずる儀式。『三寶感應要略録』巻中第五十九「唐代宗皇帝講仁王般若降雨感應（出唐記）」に「代宗皇帝永泰元年秋。天下無レ雨枯渇。代宗以二八月二十三日一。詔レ於二資坐西明兩寺一請二百法師一。講中新翻仁王般若經上。以二三蔵法師不空一、爲二都講一。至二于九月一日一。黒雲聳レ空。甘露雨降。天下得二潤雨澤一。枯死草木頓成二栄茂一。仁王般若威神不可思議…」と、『今昔物語集』巻七「震旦唐代依仁王般若力降雨語第十一」に「今ハ昔震旦ノ唐ノ代宗皇帝ノ代ニ永泰元年ト云フ年ノ秋

天下ニ雨不降諸ノ草木皆枯レ失セテ、大臣・百官ヨリ始メテ人民皆、歎キ悲ム事无限シ。其ノ時ニ、代宗皇帝、心ノ内ニ「佛法ノ力ヲ以テ雨ヲ可降キ也」ト思給テ、八月廿三日ヲ以テ詔シテ資聖・西明ノ二ノ寺百ノ法師ヲ請新翻ノ仁王般若經ヲ令講シム。三蔵法師・不空ヲ以テ忽講師ト爲リ。九月一日ニ至ルニ黒雲空ニ聳キテ甘露ノ雨降ル事、既ニ國内ニ満テリ。然レバ、天下皆潤ヲヒ得テ枯レ失ル草木悉ク、榮ニ茂ル事ヲ得タリ。其ノ時ニ、皇帝ヨリ始メ、大臣・百官・人民喜ブ事无限シ。然レバ、仁王般若經ノ威力不可思議也ト信ズ」とある。両者比較して、『今昔物語集』に見られず『三寶感應要略録』の中に見られる「仁王般若威神」とある「神」は後出の「神靈」に拘わるか。

◇感…前出『三寶感應要略録』「唐代宗皇帝講仁王般若降雨感應出唐記」の「感」に負った表現か。『説文解字』に「動ニ人心ニ也」。『倭玉篇』に「コトハル　フル、　ヨロコブ　イタム　ウゴク　ウク」とある訓から「ヨロコブ」を採り、「ヨロコビ」と読んでおく。

◇來…『類聚名義抄』「來」に「カヘル　ク　キタレル　キタス　コノカタ　ツトム　マウツ　ミタル」とある訓から「コノカタ」を採る。『孟子』「盡心下」「由ニ孔子而來、至於今ニ、百有餘歳、去ニ聖人之世ニ、若レ此、其未レ遠也」がその例。

◇草不レ青…「草」を「青」いとするものに白居易「感レ春」の「草青臨レ水地、頭白見レ花人」、また李商隠「訪ニ白雲山人ニ」の「瀑近懸崖屋、陰陰草木青」がある。

◇惣…三好似山『廣益助語集例』「惣與レ總同。又摠與レ總同。摠將領也。又合也。皆也」とする。また『玉篇略』上に「ソウ、スヘテ、アラハル」と訓じている。すべて、の意。

◇神靈…自然現象を神意と見なした表現。『春秋公羊傳』僖公十一年二月に「楚人謂ニ宋人ニ曰、子不レ與ニ我國ニ吾將レ殺ニ子君ニ、宋人應レ之曰、吾賴ニ社稷之神靈ニ、吾國已有レ君矣」とある。

◇何爲…清劉淇『助字辨略』「何爲猶云ニ豈然ニ」とあるように詠嘆を表す。『白氏文集』巻二「續古詩十首（八）」「何爲腸中氣、鬱鬱不レ得レ舒」。ただここの「爲」は平声のため、ための義ではなく、おこなうの義で解釈した。

◇頂上重加レ頂…頂生王の故事に拠った表現。『仏説頂生王因縁經』や『仏説頂生王故事經』に説かれる。『仏説頂生王因縁經』では帝釈天の代わりに阿修羅を撃破し天上界で欲望の最上を究めた頂生王が、老いと死に迫られ、布施の重要性を認識するに至ったという内容。『仏説頂生王故事經』では四洲を支配しても満足しなかった頂生王が、帝釈天を放逐して天上界を支配しようとするに到り、神通を失って下界に墜落して果てたとする（『仏書解説大辞典』〔昭和八年十一月、大東出版刊〕に拠る）。道真の表現は『仏説頂生王因縁經』巻一に「今此太子従ニ頂上ニ生、應レ名ニ頂生ニ」とある叙述に拠るか。また巻三に「香風時來吹去、萎華更雨新者」とあって、雨乞いとの関連もあるのではないか。なお「頂」は『倭玉篇』に拠れば音読み「チヤウ」。「チヤウ」と読んでおく。

◇戴…『類聚名義抄』に「イタ、ク　ウヤマフ」とある。東寺観智院旧蔵本『三寶繪詞』「小野朝臣麿」「我頂ニ多羅尼ヲイタタキ背ニ千手經ヲヲヒタテマツレリ」、関戸家本「我。うへにたらにをいたゝきせなかに千手經をおへり」とある。東寺本で

「頂」とあることが注目されよう。この「頂」を『三寶繪詞注解』で「イタタキ」と訓じている。おそらく大系もそれに従って先の「頂上重加レ頂」の「頂」を「いただき」と訓ずるが、ここはあくまでも頂生王の「頂」であるので音読みにした。

◇仁王般若經…百講会で講じられた経典。『仁王般若波羅密經』のこと。ところで、その下、護國品第五に「大王。昔日有レ王。釈提桓因爲レ頂生王。來上レ天欲レ滅二其國一。時帝釈天王即如二七仏法用一。敷二百高座一請二百法師一講二般若波羅密一。頂生即退。如二滅罪經中説一」とある。ここにも頂生王が見える。

【試訳】

191　金光明寺百講会にて、喜びを感じて

日照りのため三十日このかた草も青くなかった

しかしながら今朝方雨が降ってすべて神霊のなせる業のようである

雨が降ったのだからどうしてまた雨乞いをして雨を降らせた

頂王の上に重ねて頂王を加えることをしようか

ただ末永く戴くのである雨を降らせる力を持つ仁王般若経を

【考察】

底本「降」一字欠、しかもこの欠字は行の途中のもの。もっとも左端に位置する箇所なので、原本に近い段階でそのような欠損が生じたか。また、この字は川口本でも字配りなど同様に欠字。校異でもわかるように、写本のすべてと刊本のいくつかが欠字。

内容面からは道真が『仏説頂生王因縁經』や『仏説頂生王故事經』、『仁王般若波羅密經』等の仏典にも典拠を求めていたことが察せられる。ところで道真が直接、『仏説頂生王因縁經』または『仏説頂生王故事經』を引用したとも考えられるが、この法会で用いられた『仁王般若波羅密經』の頂生王の叙述を参考にしたとも考えられよう。

〈付記〉注釈の作成にあたって、諸本の翻刻・調査・紹介を快諾して下さった内閣文庫・尊経閣文庫・東京大学付属図書館・京都大学付属図書館・賀茂別雷神社・陽明文庫・多和神社・蓬左文庫・道明寺天満宮・京都府立綜合資料館・川口氏の各位に、深謝申し上げます。ありがとうございました。

（本学助教授）